Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

038

# 保育の場における、幼児の感情表出に関する研究

## その1. 児の感情表出

○萩原英敏　藤森宇
（淑徳短期大学）　（美住幼稚園）

I、目的

「幼児が保育所や幼稚園で、どのような感情表出をし、それを保育する者が、どのように受けとめ、働きかけていくか」という事は、保育の現場においては、非常に大切なことである。しかし、この感情表出に焦点を当てて研究されたものは、研究方法の困難さもあって、報告が少なく、今でも感情の下位概念の情緒の分化過程を示した、Bridgesの研究が紹介されているほどである。

そこで、今回は4歳の男児（I男）を、保育期間の2年間追跡調査した。そして以下の観点から、児の感情表出を明らかにしようとしたのである。

(1)保育場面における、I男の感情表出には、どのような感情語であらわされるものが多いか。

(2)保育の2年間で、感情表出がどう変わるか、特に快感情、不快感情に大別して比較してみる。

(3)快－不快の感情が、観察場所の違いでどう変ってくるか。

(4)快－不快の感情が、保育者や仲間など対人関係でどう影響されてくるか。

(5)快－不快の感情が、課題の有無と、どう関係してくるか。

(6)快－不快の感情と、児の対象に対する能動的な働きかけ、受動的な働きかけと、どう関係しているか。

(7)快－不快の感情と、児の活動の賦活レベル－活動的であるか、活動的でないか－と、どう関係しているか。

II、方法

1、対象

M園のI男（4才）…本児は入園当初、集団生活に慣じめず、不適応行動を起こす事の多い児である。その理由として、まだ文章が二語文程度で言語などの発達が遅い事、母子関係が稀薄である事、入園前の外遊びが十分でなく社会性が未熟な事などがあげられる。なぜ、あえて、このような不適応児を対象としたかと言うと、問題のない児に比べて、全体的な発達が遅い故に、それだけ①他の問題のない児では、もう余り強く出さない幼ない時の感情を、表出するだろう。②幼ない時のものが表出されるので、2年間の感情の発達がみられるのではないか。③表出が何度も繰り返されると考えられる為、感情の分類が容易となるのではないか。の3点において、有利な面が予想されたためである。

2、場所

M園内

3、期間、日時

昭和63年4月～平成2年3月

午前9時～午後1時の保育中の1時間

観察回数8回

4、方法…ビデオ観察

ある特定な感情をとらえる方法としては、その表出を容易にさせる為、場面設定をして観察するというやり方も考えられるが、目的の為には、表出が、質、量とも豊かに出るような状況にしておかなければならない。それ故、何ら場面設定をせず、普段の保育での姿をビデオでとらえることにした。なお撮影者も、見知らぬ人がはいって、普段の姿が出ないことの無いよう、対象児がよく見知っているM園のF先生が当たった。

5、評価

i、感情の分類化

まずプリテストとしてIzardが示した、快－不快に大別される10個の感情語を、M園の先生7名に、「園児に、このような感情が認められるか、また、この感情語以外に認められる感情が他に認められないか」について調査した。その結果、次のような感情表出が認められる事が明らかになった。

○快－感情語

①興味、おもしろい、興奮、②楽しみ、喜び、うれしい、愉快、心良いふざけ、心良いおどけ、③驚き、びっくり、変だ、④満足感、達成感、勝利感、⑤甘え、⑥可愛がり、可愛さ、⑦望み、期待感、ワクワクする、⑧得意がる、自慢気である、見栄を張る、⑨安堵感、心地良さ、⑩解放感

○不快－感情語

①苦悩、不安、悲しい、落胆、失望、やるせなさ、②怒り、激怒、いらだち、やけっぱち、③嫌悪、憎悪、拒否、不愉快、④侮辱、軽蔑、くやしさ、嫉妬、無駄



NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

だという感じ。⑤恐れ、恐怖、こわい、心配、あせり、心に痛みがある。⑥恥、屈辱、はにかみ、とまどい、まごつき、ずる、恥の含まれたふざけ。⑦罪、後悔する、残念がる。⑧つまらない、あきる。⑨さびしい、⑩つらい。⑪不満感、未達成感、じれったい。⑫拘束感、動きたい。

ii、ビデオ分析における観察の一致度

ビデオ分析においては、1分間に観察されたものを1単位として分析した。（今回は、計8時間なので、480単位の分析となる。）そこで、分析した2人の観察者（HとF）の感情語の一致度を調べたところ、62%であった。不一致の例を示すと、楽しみ－おもしろい、心良いふざけ－喜び、怒り－拒否、悲しい－不安、などである。他の項目の一致度は、対人関係81%、対象への関係79%、賦活レベル71%である。なお、一致しない時、再度ビデオを分析し、分類していった。

iii、評価場面の内容

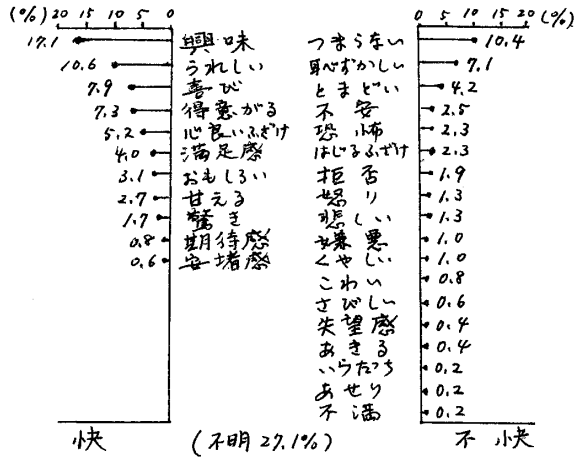
評価の対象とされた、8回の観察場面がどのようなものであったか、その1例をここで示す。

4回目、昭和63年10月

「音楽に合わせて歌ったり、仲間とふざけあったりしている。出欠をとりだす段になると対象児は、セロテープを隣の子の額や自分の額につけたり、はがしたりしていて遊んでいたが、自分の名前を呼ばれると、ハイときちんと答える。絵を描く事になり、本児は保育者と何を描くか相談して納得した様子でかきはじめる。描きおわった後、それを保育者や仲間のところに見せに行く。これなあにときくと、赤ちゃんと言って、みせびらかすが、ある仲間から無視され、つまらなさそうに、自分の机にもどる。・・・・・」

## III. 結果と考察

### 1、保育場面における、感情表出




この結果を、Izardが示したものと比較してみると、まず快感情では、「興味・興奮」「楽しみ・喜び」の感情はよく認められるが、「驚き・びっくり」はあまり認められず、そのかわりに「得意がる」が多くみられた。次に不快感情では、「恥・屈辱」「苦悩・不安」「恐れ・恐怖」「嫌悪・憎悪」「怒り・激怒」「侮辱・軽蔑」が認められたが、年齢のせいか「罪」のみみられなかった。その一方で、Izardの分類にはない「つまらない」が一番多く認められた。

### 2、2年間の感情表出の変化

快

| 感情＼観察時 | 興味 | おもしろい | うれしい | 喜び | 心良いふざけ | 驚き | 満足感 | 甘える | 期待感 | 得意がる | 安堵感 | 小計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| S63.4 | 7.5 | 6.0 | 0 | 6.0 | 0 | 0 | 0 | 1.5 | 0 | 3.0 | 0 | 26.9 |
| S63.6 | 18.2 | 0 | 1.3 | 5.2 | 5.2 | 3.9 | 16.9 | 0 | 1.3 | 0 | 2.6 | 67.5 |
| S63.7 | 17.1 | 1.3 | 2.9 | 22.9 | 0 | 1.4 | 1.4 | 0 | 0 | 1.3 | 0 | 64.3 |
| S63.10 | 21.9 | 0 | 5.5 | 0 | 1.4 | 1.4 | 1.4 | 0 | 4.1 | 13.7 | 1.4 | 50.7 |
| H1.2 | 10.4 | 0 | 11.9 | 3.0 | 3.0 | 1.5 | 1.5 | 0 | 0 | 0 | 0 | 31.3 |
| H1.7 | 8.6 | 6.2 | 8.9 | 11.1 | 9.9 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4.9 | 0 | 50.6 |
| H1.11 | 10.1 | 0 | 15.9 | 1.1 | 11.2 | 2.2 | 1.1 | 10.1 | 0 | 3.4 | 0 | 55.1 |
| H2.3 | 19.6 | 3.7 | 4.9 | 2.4 | 0 | 0 | 2.4 | 1.2 | 0 | 7.3 | 0 | 36.6 |

不快

| 感情＼観察時 | 非べしい | 失望感 | 怒り | いらだち | 嫌悪 | 拒否 | くやしい | 不安 | こわい | 恐怖 | あせり | 恥ずかしい | とまどい | はじるふざけ | つまらない | あきる | 不満 | さびしい | 小計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| S63.4 | 4.5 | 0 | 6.0 | 0 | 1.5 | 4.5 | 3.0 | 4.5 | 1.5 | 0 | 0 | 0 | 1.5 | 13.4 | 0 | 3.0 | 0 | 0 | 43.3 |
| S63.6 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3.9 | 0 | 0 | 0 | 1.3 | 0 | 5.2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 10.4 |
| S63.7 | 0 | 0 | 0 | 1.4 | 0 | 1.4 | 0 | 7.1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 5.7 | 0 | 0 | 0 | 15.7 |
| S63.10 | 0 | 1.4 | 0 | 0 | 2.7 | 1.4 | 0 | 0 | 0 | 1.4 | 0 | 5.5 | 0 | 1.4 | 15.1 | 0 | 0 | 0 | 28.8 |
| H1.2 | 4.5 | 0 | 1.5 | 0 | 1.5 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3.0 | 0 | 17.9 | 0 | 0 | 17.9 | 0 | 0 | 0 | 46.3 |
| H1.7 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3.7 | 0 | 1.2 | 8.6 | 8.9 | 0 | 2.5 | 0 | 0 | 0 | 25.9 |
| H1.11 | 0 | 1.1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1.1 | 0 | 0 | 2.2 | 0 | 5.6 | 12.4 | 1.1 | 10.1 | 0 | 0 | 0 | 33.7 |
| H2.3 | 0 | 0 | 1.2 | 0 | 1.2 | 1.2 | 2.4 | 4.9 | 0 | 6.1 | 0 | 2.4 | 0 | 0 | 18.6 | 0 | 1.2 | 3.7 | 39.0 |

まず、小計から全体の変化をみていくと、年齢による変化はあまり見られないが、夏期の方が、春期・冬期よりも快感情が多く認められる。これは夏期の方が踊りをはじめ活発な活動多いことの他に、この時期クラスにも慣れ、快感情が出せる心の余裕が生まれたきたのではないかと考えられる。一方、春期はクラスに十分慣れない為、冬期は活動が不活発だったり、クラス全体が落着いてきて、それ程快感情を出す場がなくなった為、このような結果になったと考えられる。次に感情語をみてみると、次のような変化がみられる。

| | 年少の初期 | 年少の中期 | 年長時 |
|---|---|---|---|
| 快 | 得意 → 心良いふざけ | | |
| 不快 | はじるふざけ → 恥ずかしい<br>拒否 → つまらない | | |

### 3、他の観点

まず(3)の観察場所の違いでは、快感情は部屋の場合が多かった。(4)の対人関係では、先生→多数の仲間→特定の仲間→本児のみの順で快が多かった。(5)は課題有り。(6)は能動的。(7)は活動的なほど、快感情が多く認められた。



NII-Electronic Library Service